

4. 未処理造林地におけるクズ根株数

薬剤枯殺効果の把握をするためには未処理造林地におけるクズ根株数の調査が必要であるが、本県県営林で掘取枯殺を実施した資料があるので、これと対比することにした。

(1) 掘取り枯殺地

県営林担当事務所ごとに1カ所づつ実施した。

(2) 調査方法

クズの多い箇所プロットを取り、プロット内のクズ根株を掘り取って数えた。

(3) 調査結果

調査結果は表3のとおりである。

表3 未処理造林地におけるクズ根株数

調査地	林令	プロット面積	プロット内クズ株数	ha当り換算クズ株数	備考
No.1	1	50m ²	570株	11,400株	
No.2	2	50m ²	530株	10,600株	
No.3	4	100m ²	662株	6,620株	
No.4	4	100m ²	630株	6,300株	
No.5	6	100m ²	143株	1,430株	
No.6	6	100m ²	60株	600株	

5. 事業的効果について

以上3つの調査結果からみて、薬剤枯殺の事業的効果はかなりあったものとする。しかしさらに効果をあげるためには

- (1) 見おとしによる未処理株をいかにして少なくするか。
- (2) 種子から発芽して繁茂するクズをいかにして少なくするか等の問題点も多い。

49. 林地除草剤試験

鹿児島県林試験場 田中郁太郎

最近ススキに対する除草剤として脂肪酸系の除草剤が実用化され、ススキの殺草効果が大いことが各地で実証されてきた。しかしながらこれらの薬剤は殺草効果がかなり大きいため使いかたによってはかなりの植生の変化がみられる。今回散布後3年間継続調査を実施した結果について報告する。

試験方法

1. 使用薬剤および散布量

No.	使用薬剤	散布量	備考
1	NaClO ₃ 50%粒剤	1.0kg/a	手撒きスポット散布 4倍の水を添加 押し噴霧器で散布
2	"	1.5kg/a	
3	TFP 30%液剤	100cc/a	
4	"	167cc/a	
5	無散布区		

2. 薬剤散布日昭和43年4月13日

3. 試験区

同一山系にある、やや湿潤地(BD崩積型土地)と、やや乾燥地(BD(d)型土地)のススキ繁茂地に設定、薬剤散布の翌日、やや湿潤地にはスギ、やや乾燥地にはヒノキを植栽した。

調査結果

1. 散布前の植生状況

試験地は過去7年間ススキの叢生していた場所である。薬剤散布時のやや湿潤地におけるススキ株数は、47株/a、平均株直径は52cmであった。やや乾燥地は叢生状態で株としてはままとまっていなかった。

2. 土壌および地形

	土 壤 型	母 材	A層の厚さ	傾 斜	方 位	標 高
やや湿潤地	BD崩積型	火山灰	25cm	0°~1°	NW	200m
やや乾燥地	BD(d)型	火山灰	15cm	25°~35°	EおよびW	200m

3. 散布時の降水量 mm

-2	-1	散布日	1	2	3	4	5
9	—	—	—	0	0	2	7

4. 除草効果

43年8月, 44年8月, 45年8月調査。Ipolot 内に3カ所, 1m²の刈り取り区を設け, 植生別に生重量を測定した。(図-1)。

占有面積は5%段階で観察調査した。(図-2)。

TFP 液剤については, これに関する他の報告と同

じように, かなりのススキ殺草効果がみられ広葉雑かん木の繁茂が目立ったが, 年数の経過にともないススキが若干回復してきた。占有率の変化では, 年数の経過にともない落葉広葉樹がかなりの占有面積をしめてきた。これはこれらの木が, 他の木本より早く大きくなるためと思われる。

5. 植栽木の残存

散布の翌日植栽したにもかかわらず一部の区を除いて葉害はほとんどみられなかった。

46年2月植栽後3年経過した時点で植栽木の残存状態について調べてみた。一番多く生存している処理区を100として各処理区の残存率を計算した。(表-1)。

(表-1) 植栽木の残存率表

処 理	スギ残存率 %	ヒノキ残存率 %
NaClO ₃ 1.0kg区	72	76
NaClO ₃ 1.5kg区	61	84
TFP 100cc区	100	100
TFP 167cc区	83	73
無 散 布 区	33	69

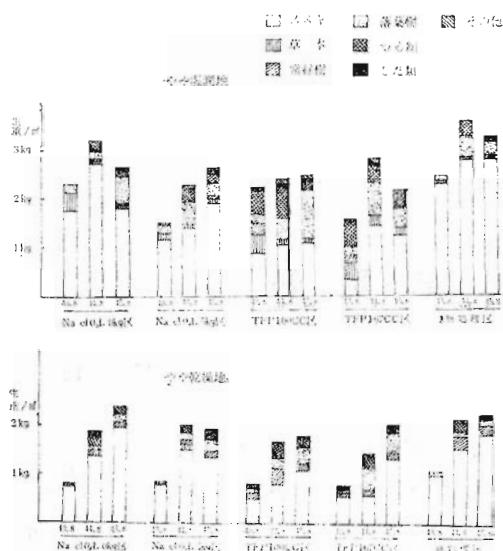


図-1 植生別生重量の推移

ま と め

除草剤により, 一時的にススキが減少しても時間の経過とともに若干の回復がみられた。

ススキ以外の植生では, 落葉かん木の増加が目立ってきた。除草剤の1回散布だけでも, ヒノキは比較的残存していた。なお, 樹高成長は普通施業のヒノキと差はみられなかった。